981116(HOSYO2)

補章2.　スペクタクル理論とオリンピック：

テレビ・スポーツ映像の解釈に向けて

2.1　緒　言

スポーツというものは、競技大会のテレビ中継やテレビのニュースによって日々かなりの程度露出され続けている。人々のスポーツ・イメージはこのようなスポーツ映像の影響のもとに形成・強化されているといってよい。今世紀の始めからスポーツは映画によって記録され続け、ヘゲモニー装置として文化の再生産に一翼を担ってきた。最近はテレビのスポーツ中継がこれに取って代わりつつある。本補章は、このような事態を念頭に、テレビによるスポーツ報道、特にオリンピックの式典とパフォーマンスに焦点を当てて、分析・記述・解釈を進めるための予備的・試行的な試みとして補章の性格をもつものとして位置付けられる。

さて、スポーツ文化を言語学の用語を用いて、共示義（コノテーション）の体系や、共有される意味の網の目と考える立場をとるならば、興味深い側面が浮かび上がってくる。これは次のように説明することができる。

意味の表示義（デノテーション）と共示義（コノテーション）の違いを単純化するために自然科学と文化科学に対応させて考えて見る。先ず、人間のパフォーマンスや身体の運動は、カタカナの「モノ」として生理学的、心理学的、物理学的、解剖学的、身体工学的など自然科学的な立場から研究したり問題にすることができる。ここでは人間の身体運動の自然科学的な意味、つまり、科学的なデノテーションとしての意味が主要関心事となる。

第2に、その動いている人間が「モノ」としてだけでなく、生きている生活世界の中で他人との関わりや自己の世界観や価値観に基づいて行動する社会的事象としての側面が考えられる。これは「モノ」に対して「コト」、つまり事象ということになる。この「モノ」をとりまく「コト」には、「モノ」に対する表示義ではなくそれに伴った共示義（コノテーション）が重要な意味を持ってくることになる。ここではさらに、上位（メタ・レベル）のコノテーションも当然考えられる。これが本来的な文化的な事象の表示義と共示義の関係をさすのであるが、ここでは、考察の次元を単純化して示すために自然科学的な位相と対比してあえて言及してみよう。

例えば、1988年のソウル・オリンピックで劇的であったベン・ジョンソンのドーピング事件の場合を例に考えてみよう。彼の疾走や薬物の生体に対する様々な影響については自然科学的な側面から様々な研究が可能になる。例えば、走法のメカニズムを生理学的、

解剖学的、生化学的、バイオメカニクス的に論じたり、薬物の生体への影響を栄養学的、生物学的に問題にすることが可能である。これはジョンソンを走る「モノ」として、薬物を摂取した「モノ」として見る立場である。

しかしながら、ドーピングという事件としての「コト」は文化的・社会的あるいは哲学的・法学的な側面からしか論ずることはできない。彼の取った行為やその取り巻きの行為を価値論的に問題にできるのは、ドーピング事件の共示レベルでの意味論になる。これは、後述するようにさらにメタ・レベルのメッセージについても考えを巡らす必要性を生じさせる。

同様に 1988 年ソウル大会のフローレンス・G・ジョイナーの微笑みながらの疾走は「コト」としての共示的な意味が重要になってくる。企業がさっそく彼女と高額の CM 契約を結んだということは彼女のコノテーションに数億円を支払ったということになるわけである。そうするとあのマニキュアした爪は1本当たりいくらになるのであろうか？

このような次元でスポーツを考えると、スポーツの文化論を多層的に展開することが可能になってくる。そのようなスポーツ文化論のなかでも、既に方法論の検討でみたように、スポーツを文化的な多肢的パフォーマンス・ジャンルと見なし、かつそのスペクタクル性に着目してオリンピックのスペクタクル論を展開した研究者にマカルーン(MacAloon, John, J.)がいる。彼が呈示したスペクタクル理論はオリンピックなどの巨大なショー化したスポーツの文化的な意味を論ずるには注目に値する点が多いといえる(マッカルーン,1983; マカルーン, 1988a; マカルーン, 1988b; マカルーン, 1988c; MacAloon, J.J., 1984; MacAloon, J.J., 1988)。

本補章では、従来のスポーツ解釈学の先行的知見(舛本, 1988b; 舛本, 1989a)を踏まえた上でマカルーンの理論を参考にしながら、テレビで放映されたソウル・オリンピックを物語として記述していく。中でもソウルの開会式と閉会式のスペクタクル性に着目してテクストを構成することが本補章の第1の目的である。さらにその記述されたテクストを元にソウル・オリンピックの解釈を試み、その物語性をポスト・モダンと称される現代の文化状況と照らし合わせて検討を加えることが本補章の第2の目的である。

研究方法の基本的な視座は文化解釈学的なものであり、スポーツという行動で書かれたテクストをその「プレイ・テクストをコンテクストに応じてメタ・テクストに配慮しながら解釈すること」というスポーツ解釈学の定式を敷衍する。以下では、先ずテレビ報道されたソウル・オリンピックの一般的状況を概括し、その後、ソウル・オリンピックのセレ

モニーをスペクタクル理論を援用して解釈に移るという手順を踏まえる。

2.2　オリンピック・イヤー 1988 年

さて、1988 年当時の日本のスポーツ状況はオリンピック一色であったといえる(舛本, 1989b)。先ずカルガリーの第 15 回オリンピック冬季競技大会で幕開けし、橋本聖子、黒岩彰、伊藤みどり等の選手達の活躍がオリンピック・ファンを沸かせた。続いて、1998 年の第 18 回オリンピック冬季競技大会の日本への招致合戦で旭川、盛岡、山形、長野の 4 市がしのぎを削り、最終的に長野市に決定して日本への誘致運動を展開することになった。旭川市はこの招致合戦のために 2000 万円の税金を使ったと聞くが、長野に敗れ去ってしまった。1991 年の IOC の総会で世界の各国と長野市は開催権を争った結果、オリンピック招致を勝ち取った。そのためには莫大な費用がかかったが、金集め組織が結成され、日本のアマチュア憲章の改訂に中心的に携わった広堅太郎が委員長に就任した。金のなる木のオリンピックの招致に日本のスポーツ界にプロ化、商業化をもたらした中心人物が座るという当然の結果が構図として生じたといえる。

また 1990 年のオリンピック・コングレス(全体会議)の東京開催が予定されていたが、オリンピック 100 周年記念コングレスを 1994 年にパリで開催する計画が浮上したことによって、東京開催を返上した問題も記憶に新しい。但し、1990 年には東京で IOC の総会は開催され、1996 年のオリンピックの開催地を審議してアトランタに決定したのは周知の通りである。ここで日本は冬季オリンピック長野大会に向けて一大キャンペーンを展開したが、全体会議は金にならないため当初から準備に及び腰であったという。このようなオリンピック・ムーブメントとは遠くかけ離れた JOC や日本体育協会のオリンピック・コングレスに対する姿勢はマスコミから批判を受けることとなった。

さらに極めつけはなんといっても 1988 年 9 月にソウルで開催された第 24 回オリンピック競技大会(通称ソウル大会)である。韓国は国を挙げて国力や経済力、国民の統合力を誇示することに成功した。開会式と閉会式のパフォーマンスは民族性を基調とした演出で見るものとしてはなかなか圧巻であった。ボクシング競技での韓国チームの乱闘騒ぎがなければ、民族、国家、工業・経済国としてのイメージは更に高まったに違いない。国家事業としてのオリンピックが成功裡に終わったといえる。南北共催の動きが水泡と帰し、商業五輪の流れをロサンゼルス大会から受け継いだ政治的・経済的なオリンピック大会であっ

たが、韓国に及ぼした政治的・経済的な波及効果は計り知れないとされた。

日本に関しては、橋本聖子が自転車競技のスプリントの代表になったことによって、スポーツ報道メディアは当初「聖子フィーバー」の観を呈した。アジアで2回目の開催となったオリンピックが身近な隣の国で開催されるソウル大会であることや、夏冬連続出場という快挙を成し遂げた橋本聖子が、あのカルガリーで全力疾走を繰り返し倒れながらゴールインした感動を再び我々の茶の間にもたらしてくれるのではないかという淡い期待をマス・メディアがかき立てた。残念ながらその期待は見事に裏切られたのであるが。日本の柔道陣の失墜もある程度予想されたが、余りにも惨憺たる様相を呈したといえる。鈴木大地の背泳での金メダルがなければ、メダルをとりまく話題にマス・メディアは苦労したに違いない。ヒーローの出現を待ちわびていたのは日本国民よりもマスコミ関係者の方が切実であったからである。

さらに、ベン・ジョンソンやブルガリア重量挙げチームのドーピング事件は大きな反響を呼んだ。これらの事件はアスリート達の「勝ちたい病」の蔓延と薬漬けの身体訓練が常態化していることを如実に示した。ソウルでは 10 名がドーピング検査に引っかかったとされる。この一連の事件から、トップ集団の証として、オリンピック大会や国際サーキットに出場し、さらに CM 契約等にありつくためには常に勝たなければならないという現実が選手達を待ち受けている、という状況が既にこの時期に厳然としてあったと解釈できる。ある意味では選手は時代の被害者、スポーツ・コマーシャリズムの犠牲者であるといってよい。選手の取り巻きのコーチ陣やドクター陣、あるいはマネージャーや広告代理店こそ責められるべきである。いかにしてドーピング・チェックをくぐり抜けるか、ということにしのぎを削るスポーツ医・科学の姿勢をもってしては、人間的な生身のスポーツは取り戻すことは不可能である。薬物使用は核兵器と同じように「あいつが止めれば俺も止める」という態度で臨む限り根絶されえない問題である。逆に、人体に害がなければ薬物や栄養剤が許されるのは何故かという疑問が浮かんだりもする。IOC や国際的な競技連盟は薬物使用を根絶するために本腰をいれ始めた。ベン・ジョンソンはそのスケープ・ゴートであったともいえる。但し、これは氷山のほんの一角に過ぎなかったといえるのである。

一方、「美しく微笑んで走り抜ける」フローレンス・ジョイナーの軽やかな疾走は、オリンピックのモットーである「より速く・より高く・より強く」に「より美しく」というメッセージをつけ加えたように思われた。彼女が獲得した 100m 走、200m 走、400m リレーの金メダルと 1600m リレーの銀メダルはさっそく日本のスポーツ企業との CM 契約に

結び付いた。「より速く」CM と結び付け、「より高く」マネーを要求し、「より強く」アピールしてお金を要求することがオリンピック大会に限らずスポーツの国際競争での勝利によって可能になったわけである。彼女の疾走する肉体はドーピング検査をかいくぐったのであるが、真相は本人と彼女の取り巻きだけが知っていることである。金メダルのメッセージは「これは卓越性の証明である」といえるが、メタ・レベルのメッセージは「それは金(カネ)をかせぐ卓越性の証明である」ということになるかもしれない。そのためには「美しく勝つ」ことがより重要な意味を持ってくる。イメージこそ重要なメッセージを運ぶからである。

このように 1988 年当時の日本のスポーツ状況はメダルへの執着を余儀なくされたチャンピオン・スポーツ一色の様相を呈した。衛生放送はこれを好機とばかり売り込みをはかり、新聞はカラー化を売りものにした。スポーツ関連企業に限らず、多くの企業が総力を挙げ血眼になってスポーツ・イベントの経済的効用性を見逃さないように努力した。政治家達もスポーツの権力的ダイナミズムに関わらざるを得なかった。オリンピックは巨大な国際的政治・経済・文化・科学技術のショー、一大スペクタクルとなったようである。「見るスポーツ」というおかしな命名がリアリティを確実なものにした反面、一般市民はスポーツをはるかに疎隔されたものとして対象化し受動的なスポーツ享受しかできなくなる、という構図がますます強化された。また、商業オリンピック(コマーシャリンピック)はソウルで 3 億 5 千万ドルの利益をあげたと報道されたが、庶民には無縁の世界であった。

ところでこのようなオリンピックの状況は、政治的には国家間の模擬戦争としてのメダル獲得競争というナショナリズム、経済的には大規模な予算を工面するための商業資本を導入せざるを得ないコマーシャリズムという、2 大イズムからもたらされた問題がほとんどであるといってもよかろう。

メダル狩りには強い選手が必要となる。選手を強くするためには働かずにトレーニングに集中して打ち込む必要がある。効率性という近代(モダン)が志向する価値観に基づいてトレーニングをしなくてはならない。このような東西間の競争や国威の発揚には国のレベルでの取り組みが必要になる。報奨金や年金の支給もその一環であった。

お金のかかる巨大な大会のためには商業資本の力を借りなければならなくなる。その最たるものはテレビの放映権料であるし、協賛企業の資本である。企業がスポンサーとして喜んで高い金を払ってくれるようにするために IOC の出来ることといえば、全世界を通じて出来る限り多くの人達がオリンピックを見てくれるようにプロも含めて有名な選手を

集めることである。今一つは視聴者が見て面白く楽しめるようなパフォーマンスやイベント化に大会の儀式や競技のルールを変更することである。このようになると企業側も自社のイメージ・アップのための宣伝費として協賛費を喜んで払うことになる。有名で強い選手を出場させるためには賞金や賞品が必要である。名誉だけでは食っては行けないのが人間であるからだ。

こうして巨大化した「コマーシャリンピック」という商業五輪が成立してきたのである。国や IOC はアスリート達の鼻の先に賞金という人参をぶら下げているのである。実際は直接にオリンピックで賞金が出るのではなく、そこで勝つことがその後の選手の出場料や賞金を高くするのである。しかし、中には年金や功労賞として直接的にお金を手にする選手達もいる。かくしてオリンピックは「ショー」、一大スペクタクルになってしまった。全世界的で広範なレベルで「見られる」ことを前提とした「見せること」が IOC やテレビ局の主要関心事になってしまった。オリンピック・ファンはテレビ・メディアで「見せられること」を余儀なくされてしまったのである。しかも、1996 年には IOC はそのようなテレビによる過去のオリンピック大会の映像に対しても独占的使用権を主張し、使用料を払わないと過去の映像を利用できなくしてしまった。

いずれにしても、テレビによるオリンピック映像は IOC の支配下に取り込まれてしまった時代が到来した。以下では、これまでのオリンピック大会の開会式・閉会式のパフォーマンスを陰陽五行説に基づく大きな物語として構成し、一大スペクタクルとして展開した 1988 年のソウル大会のテレビ映像に焦点を当ててみたい。

2.3　ソウル・オリンピックの開会式・閉会式の物語

1988 年 9 月 17 日に開会し 10 月 2 日に閉幕した第 24 回ソウル・オリンピックの 2 大セレモニーは陰陽の対立的・相補的関係から成っていた。その物語の哲学や象徴的意味については、開・閉会式の式典委員でもあった李御寧(1988)の解説が詳しい。それを参照しながら NHK のテレビ中継や新聞の報道を基にテレビ映像によるオリンピックのテクストを構成してみたい。

このような手法は現実認識のためにテクスト構成するということになれば問題を多く含むといえるかもしれない。しかしながら、一つのオリンピック・イメージとして流布されていたものを理解するためにテクストを構成するということであれば、問題はさほどない

と思われる。またこの手法は MacAloon(1988)がマス・メディアの報道をもとにオリンピックのストーリーを構成したことを参考にしたものである。特に、巨大化・ショー化したオリンピックを「見せよう」という思惑で構成されているオリンピック大会のそのスペクタクル性を問題にするためには、テレビや新聞等のメッセージの送り手によって構成され、凝縮されたオリンピックのイメージを材料にして時代のオリンピック観を読みとることも必要である。これはつまるところ「語りについての語りを読む」という解釈学的な姿勢に基づくものである。さらにそのような解釈の基盤は解釈者の先入見を土台にせざるを得ない。解釈の妥当性はデータを収集することやその分析よりも、このような先入見の妥当性こそが根本的に問題にされるべきである。ちなみに最近文化人類学の領域でもフィールド・ワークの認識論が展開され、他者認識の可能性や観察・記述・解釈に関わる問題が指摘されているがここでは詳細に触れない。「厚い記述」はギアーツしか不可能であるという指摘もあるが、このような点については舛本(1989a)の小論を参照されたい。

2.3.1　開会式のテクスト

開会式の演出のテーマは「和合と進歩」であるとテレビ中継では解説されていた。「和合」とは梵語の samavaya「内属」という哲学的なカテゴリーの漢語訳であり、単なる調和(harmony)ではなく、「徳（性質）と業（運動）と同（普遍）と異（特殊）とが実体に内属する関係を一つの原理として立て、それを和合という。」(下中編, 1987,哲学事典, p.542)とされる。人間に普遍的なものと人間各人や民族などの特殊とが共に内属した存在状態を理想とする東洋的な思想である。ソウルでは開会式での壁をなくした種々のパフォーマンスの試みがそれを表そうとしたと考えられる。国家やイデオロギーの分断や対立、人権や貧富などの様々な障壁を乗り越えようという人間の姿をモチーフにしている。そのオープニングは漢江の江上祭であった。世界の海に通ずるこの川は和合の源の意味を担わされた。演出も閉ざされた空間としてのスタジアムの内部だけでなく、漢江とその川岸を巻き込んだものであった。種々のパフォーマンスはこうして、テレビの視聴者とスタジアムの観客、さらにスタジアム外のスタンドの観客という3カ所の視線に対して演じられた。

スタジアム自体は和合を生み出す「母胎空間」として位置づけられた。オリンピック憲章に基づいた月並みなセレモニーは毎度のこと繰り返されるのであるが、160 ヶ国という参加国の数字がモスクワ、ロサンゼルスというボイコット合戦の両大会に続くソウル大会の和合という意味を象徴する。その中で、開会式の祝祭は陰陽の一方の陽を演じた。聖火

という太陽神や天からの幸福の降臨、主人公を待つ場の設定、聖火到着、太陽を受胎した喜び、悪や混沌の進入、テコンドーの集団演舞による悪の撃退・壁の撃破、世界の輪を自在に転がす少年は東洋的余白の演出、純真な子ども達による自由な遊びは新しい芽の象徴である。「コノリ」による対立と一体化は和合の象徴である。クライマックスは出演者全員による公式主題歌「ハンド・イン・ハンド」の合唱であるが、NHK の放送は、残念ながらこの最後のクライマックスを日本の視聴者に映像として届けなかった。このような物語(ストーリー)は人類の平和を基調とした儀礼と祝祭であるといってよかろう。

李(1988)はこのような開会式には新アジア感覚が随所に配置されていたと述べている。これは 1980 年代の NIES 諸国の代表的地位を確保した韓国の力や発展の誇示であるともいえる。参加者の演技だけでなく観客も演ずることが要求された。そこにはマン・パワーとそれを統制する権力の強さが窺い知れる。沢山のカードを用いた和合の英語訳であるとされる HARMONY の人文字がその典型であり、観客全員による合唱もその一つの演出である。このような仕掛けによって、「和合」の普遍と特殊、性質と運動とが一体化した内属の状態というものが構成できたかどうかということについては、いささか疑問の余地があろう。

さらに、開会式の随所に発揮された韓国や中国、日本の古来からの思想の一つが「三才」思想である。この思想が東アジア文化圏を支えていると李は言う。これは天地人の併称であり、『易教』には天道、人道、地道を合わせて三才としたとされる(下中編, 1987, 哲学事典)。李は天と地と人が一つの調和した世界を生成するダイナミックスとしてソウル・オリンピックの象徴を解いている。エンブレムは赤・青・黄の 3 色の勾玉でデザインされているが、そこには赤＝天界＝陽、青＝地界＝陰、黄＝人界＝陰陽の媒介、という図式が表わされている。このような三色のコスモロジーは随所に「隠し絵」のように配置されているのだ。オリンピック・科学会議は天、芸術展示は地、「人」は両者を結ぶオリンピックの中心としての「スポーツ競技」である、と李は言っている。

一方、オリンピックのシンボルカラーは 5 色である。天から舞い降りる幸福は 5 色の五輪のパラシュートであった。それを 800 人の女性の舞が受け止める。天と地の和合である。人間がいちばん幸せだった頃の様子を古代宮中の踊りで優雅に表現する。このように五輪のシンボルカラーも韓国の三才思想に溶融していくように配慮されていた。

この後に、突然舞台は急展開し、世界 60 ヶ国から集めた 198 種、838 個の仮面が登場してきた。人間の真の姿を隠した仮面の裏で、善悪、愛憎、健康と病魔、戦争と平和とい

った対立が表現されていた。そのような仮面達を眺める一段と高い位置の仮面達がいるし、それを見ているスタンドの観客、さらにそれを見おろすスタンドの屋根に備えられた韓国伝統の巨大な仮面、それを写すテレビカメラの視線、さらには、それを見る視聴者、その構図を鳥瞰的にみる解釈者。重相的な視線の構造がここに顕現する。いったい誰のために捧げられるパフォーマンスであるのか？神なのか？神からの幸福を先ほど受け取った返礼なのか？いずれにしても、多層的レベルの認識のフレーム・ワークが存在する。

そこに突然黒いヘルメットのオートバイが闖入してきた。これは諸悪の象徴である。暴力、麻薬、公害、核兵器、エイズなど現代の暗いカオスを表す仮面である。舞台は混沌、騒乱の渦となる。そこに小学生 200 人と 800 人の軍人達が登場しテコンドーで諸悪や分断の障壁を蹴破り退散させるという構成になっていた。

そのあと、場内は静寂に包まれ、東洋的な余白としてたった一人、6 才の伊泰雄少年が世界の輪を転がす。その後に 1,200 人の子ども達が韓国古来からの遊びを繰り広げ、新しき芽、汚れの無い人類の誕生を象徴する。そこでは一斉的なマスゲームは展開されない。個々人の遊びを大切にして様々な遊びが各所で展開されていた。

このように開会式の演出はコスモロジカルに展開された。李はそれを「宇宙が始まる創世期から現代の暗いカオスを乗り越え、新しき世界が開かれる人類の大叙事詩を見せるニューコスモロジーである」（李, 1988）と述べている。子ども達の自由気ままな遊びによって人類の新しき宇宙が誕生したという構図が示されていた。

東西、陰陽の対立と和合は開会式の圧巻である「コノリ」によって表現された。これは 1,000 人もの人たちが赤・青の東西＝陰陽に分かれてぶつかり合うのである。しかし「コ」は藁で創られた柔構造であり、ぶつかり合ったその瞬間、上方に高くせり上がり一体化して和合を生み出す。アジアの猛烈な力の裏に秘められた柔らかな感性を象徴的に「コノリ」は表現していると李は言っている。

この後に出演者全員がフィールドに登場し、一つの世界(ONE WORLD)を形成して「ハンド・イン・ハンド」の大合唱で「壁を越えて、我々が生きている世界、もっと住みよいように」と歌ってフィナーレとなったのである。

以上がテレビによって放映された開会式の映像ストーリー、物語である。その物語は、スペクタクルとして、民族的な祝祭的儀礼としてのパフォーマンス・ミックスが可能であるかの様相を呈している。そのようなストーリーとして式典自体が企画構成され全世界に向かって韓国のメッセージとして届けられた。

2.3.2　閉会式のテクスト

開会式が昼間に執り行われる陽であれば、閉会式は夜に行われる陰である。陰陽の対立的・相補的図式が二つのセレモニーには取り込まれていたのである(李, 1988)。

フィールド内では韓国の民族的な太鼓の伴奏を用いた「サンモ」の踊りが展開され、トラック上では新体操の「リボン」の踊りが展開された。これらの2種の踊りは洋の東西の和合を象徴する仕掛けである。韓国のサンモは頭と首を使って6mものサンモを地につけずに回してしまう。この驚異的な旋回はイリンクスの世界を生み出すものであるのかも知れない。

150人の厳選された女子高校生の掲げるソウルのエンブレムを先頭に参加国のプラカードと国旗が入場する。BGMは世界各国の童謡や子ども達に親しまれている歌を中心に構成されている。しかし、整然とした構成はここまでであった。この後各国選手団がばらばらに入場してきたのである。プラカード、肩車、横断幕、喜々とした祝祭の様相を呈していた。各国選手団が走り回る。ラインダンスを踊るグループもいる。あちこちで選手達の輪ができて踊りだす。スタンドにまで上がってくる選手達もいる。喜々とした表情が美しい。

人間は祭りで何故に走り回るのか？混沌は渦巻きのようなサンモの回旋から生じた。トラックを走り回る選手達はスタジアムという坩堝のなかで人類の調合を始めたように思えた。母胎空間としてのスタジアムはメルティング・ポットと化してしまった。これは混沌（カオス）などではなく、人類の普遍性と民族的な特殊性とを兼ね備えた選手達の調和であり、本当の意味の和合であろう。開会式のような秩序立てられた整列は形式的な調和に過ぎない。閉会式開催のアナウンスがあってもこの混沌は静まらない。混沌から新しき世界が生起したのである。ギリシャ国旗の掲揚と国歌の演奏でようやく儀礼による日常や祝祭からの分離が始まった。

閉会式のテーマは「出会いと別れ」である。大きなボールが空中に浮かぶ。その下に母胎空間としてのスタジアムが舞台装置化され、韓国伝統のカササギの伝説に基づいたS字状の橋が形成されていた。牽牛と織女の出会いの伝説が再現される。女子大生320名の扇の舞と韓国風シンバルであるバラの儀式によって、渦巻きのような踊りが展開され、辺りの悪霊を払い、回りが清められる。この踊りは橋の両方向からカササギの創った橋の上で結び会う。橋の持つ出会いという象徴的な意味は韓国では重要であるとされている。

韓国の口承伝承であるパンソリのソロと祭りの後の無事を祈る老女のサルブリの巫舞は「静寂」をあらわし東洋的余白を醸し出していた。カササギの橋の上を淡い色の装束の女性達が海の流れを象徴しながら渡って行く。男性達の持つ幟は船の帆を表し、開会式の漢江の船団パレードと対を成していた。

しかし気になるのは、このような仕掛けや演出が視線の低い選手団に理解出来るのであろうか、ということである。スタンドの観客達にも理解できるのであろうか？余りにも鳥瞰的構成であり、テレビの視聴者向けに構成されているのではないか？それとも中空に浮かぶボールに捧げたパフォーマンスであるのか？あるは神に捧げる儀礼なのか？さきに指摘したような視線の重層構造からしてもパフォーマンスの受けての主役は一体誰であるのかは確定できない。「見る・見られる」「見せる・見せられる」の混在が「見せ物」的に構成されたスペクタクルであるといえる。競技者達はここでは疎隔された傍観者に後退してしまい、観客達も距離を置かざるを得ない、という構造が生じていた。

このような演出によって出会いと別れが民族的感性で表現された後、公式の閉会のセレモニーに移っていった。SLOOC 委員長である朴世直氏が回転する演台上で閉会のスピーチを行う。IOC サマランチ会長の挨拶とオリンピック・オーダー金賞が朴世直氏に授与される。スペイン語で次期開催のバルセロナ大会への参加呼び掛けが行われ、サマランチ会長の地元オリンピックへの熱の入れようが窺えた。オリンピック旗はソウル市長からサマランチへ、そしてバルセロナ市長へと手渡された。このようにして、いつもの公式セレモニー・パターンが展開された。

バルセロナ大会のマスコットのコビーとソウルのマスコットのホドリの入場とともに両国の舞踊団が入ってきた。スペインの民族色も赤・青・黄の3原色である。青は海を、赤は情熱を、黄は太陽を表すとされる。アントニオ・ガウディの教会のイメージの尖塔模型、ピカソとミロの絵を用いたエンブレム。この3原色は、くしくも韓国の三対極の三才思想に対応していた。こうして洋の東西の出会いが始まったのである。

カササギが場外に退場するとオリンピック旗が降揚され礼砲が轟きわたった。聖火が消え赤と青の陰陽＝東西の象徴のぼんぼりが灯った。スタンドにはぼんぼりによって GOOD BYE の文字が浮かび上がる。観客はここでも演じなければならないのである。最後はティブリダンスと横笛によって、戦いが終わりその場を清め来るべき安全を祈る舞が3人の白装束の女性によって捧げられ、平和の祈願と日常に再統合される儀式は終了した。スタジアムからは灯篭を持った女性達が海の如く流れ込み、渦巻き状、唐草模様状の灯篭ダン

スを展開しスタンドは大合唱となった。

開会式と閉会式とには陰陽の対応が随所に見られ、互いに繊細に響きあって効果を高め、民族の祭典としての成功をより確実なものにしたようである。閉会式に見られる旋回を中心とした演出は混沌と眩暈を生起させる。そこから新しき空間、宇宙を生起させる仕掛けとして渦巻きが用いられたといって良かろう。

このような二つの儀式のテクストはオリンピックのスペクタクル性を一段と顕在化したといえよう。そこで演じられ見せつけられたのは民族の祭典、和合、伝統といった、非国際的、非普遍的な物語であったといえる。

2.4　マカルーンのスペクタクル理論

2.4.1　スペクタクル理論の概要

マカルーンのオリンピックのスペクタクル論をベースにして、少しスポーツのメッセージ性やそのメタ・コミュニケーション、あるいはパラドックスということについて考えてみたい。これはつまるところ共示レベルでシンボリックな意味を解釈する際のリアリティとイメージの関係の問題につながる。しかもその共示義の多層的な関係にも着目することになる。この点については、舛本(1988a, 1988b, 1989a, 1989b)の別の論考を参照されたい。概略を以下に指摘しておこう。

マカルーンは G.ベイトソンの遊戯論において展開されたメッセージとメタ・メッセージ論と、ゴッフマンのフレーム分析の理論に着目して、近代オリンピックを多肢的な文化パフォーマンスとして示した(マッカルーン, 1983; MacAloon, 1984; マカルーン, 1988c)。これはスポーツの文化ジャンル論でもある。

オリンピックを「これはスペクタクルである」というフレーム・ワークに基づいてみると「この型枠内の全陳述は大言壮語、聞き惚れるのも結構だが要注意」(マカルーン, 1988c)というメタ・メッセージを伝達していると見なされる。同様に、この他に、これは祭典ですというフェスティバル性や、儀式(リチュアル)、ゲーム、真実といったメタ・メッセージを考え、多肢的ジャンルをマカルーンは主張したのである。

ところで、否定的な陳述のメタ・レベルでの陳述は再帰的なパラドックスを伴う。ここではスペクタクルとゲームのフレーム・ワークにおいてパラドックスが生起する事になる。これはクレタ島人のエピメニデスのパラドックスに類似したものである。

さらにフレーム・ワークというものは認識の枠組みであるとともに行動の枠組みでもある。オリンピックについて特にどのフレーム・ワークを中心に見るかによって評価も変わってくる。また、見る方もその枠付けに基づいて競技者にあるべきパフォーマンスを期待するというメカニズムがそこでの重要な力学である。そうするとジョイナーの美しき疾走はどのフレーム・ワークに該当するのであろうか。

さて、マカルーンはオリンピックの変貌にともなって、フレーム・ワークとフレーム・マーカーも変形したと言う。その変容は、第1に、スペクタクルがリアリティを持ったとされるのが大きな特徴である。第2に、スペクタクル以外のフレーム・ワークが肯定文から疑問文に取って変わられている、ということである。このフレーム・ワークが疑問文化しメタ・メッセージも疑問文化するということには、再帰的には自己確認という働きが伴う事になる。例えば、遊びのフレーム・ワークでは、「これは遊びだ」というメッセージが「これは遊びだろうか？」というメッセージに取って変わられることによって、「遊びに違いない」「遊びのはずだ」という強化された肯定的な自己確認と、「遊びのはずがない」「遊びなんかじゃない」という否定的な自己確認の二つの再帰的なベクトルが見られる。これは価値判断と行動論的に興味深い視点を呈示してくれている。スポーツが遊びかどうかはこの当たりの立場から差が生じることになる。同様に否定的なメッセージを内包しているスペクタクルのフレーム・ワークについても、このような力学が働くことになり、現実とイメージの問題が浮かび上がって来くる。

2.4.2　スペクタクル理論とイメージと現実

さて日本にはスポーツ状況を言い表す際に「たかがスポーツ、されどスポーツ」という逆説めいた言い回しがある。これについてマカルーンはつぎのような視点を提出している。

スポーツに関連した言い回しの一つとしてマカルーンは、言語学的には真面目な事象を記述するのにルート・メタファーとしてゲームを用いる事が多いという。「政治的ゲーム」「恋愛ゲーム」「仕事のゲーム精神」「学問的ゲーム」日常の社会的相互作用も「人々が演ずるゲーム」と見なし、ペンタゴンも「戦争ゲーム」、神学者も「ゲームのゲーム」と称し神の救済は「喜びのゲーム」であるべきだという。しかし、同時に「ゲームに過ぎない」「遊び回っているだけだ」と他の文化領域では嘲笑的に用いる。オリンピックはこのような文化の深層の両義的な問題を触発しあおり立てる(MacAloon,　1988)と。ここにはオリンピックを事例にしたスポーツ文化に対して2重の視座(ダブル・ビジョンズ)、

つまり両義的な価値が指摘されている。

マカルーンはさらに多種のアイデンティティについてこう指摘する。オリンピックでは、我々は生きている人間を解釈し、続いて社会集団の抽象的なメンバーに変えてしまい、そうして人間の当為として願うものを理想的に代表するものにしてしまう(MacAloon, 1988)と。

いったい何が本当の現実で何が幻想なのかよく解らなくなってくる。これはどうもスペクタクルのもつ認識的な働きのせいであるように思われる。スペクタクルのメタ・メッセージは「この型枠内の全陳述は大言壮語、聞き惚れるのも結構だが要注意」(マカルーン, 1988c)というものであった。これにさらに、スペクタクルは大規模な視覚体験を味わわせるが、観客には離れた場所からの見物を強要し、演技者と観客の分離をもたらすともいわれる。そこには「見よ。だまされるな」というメタ・メッセージを並立させる。そうして選手達の努力という現実を「単なる娯楽」「単なるイメージ」に貶めるという力学が成立する。スペクタクルの結末は「スペクタクルは、その枠の中にあるすべてを影(イメージ)に変えてしまう。そして影(イメージ)はおもちゃのように遊ばれ、商品のように消費され、最後は投げ棄てられるのである」(マカルーン, 1983)と悲劇的に語られる。

ソウルの開会式・閉会式で作り上げられた平和と和合、進歩、発展といった肯定的な物語は単なるイメージであるのか。

マカルーンはこのような両義的なイメージ形成の働きを、クーベルタンが世紀末から16 年間も堪え忍んで作り上げたオリンピックの機能として上げている(1988a)。オリンピックはクーベルタンの時代に次の四つの機能を果たしたとマカルーンは主張している。(1)全人類の共通語(全人類のエスペラント)。(2)自分自身について、他者について様々な物語を語ったこと(オリンピックは物語の饗宴であり文化的なイメージの創造と交換の場)。(3)「人類を結び付ける」「人類を分け隔てる」という相反する機能を果たしたパラドキシカルな役割。(4)かなりましな娯楽という4点である。

最後は皮肉的列挙であるが、いちばん強調されて良いのは「4 年に一度人類とは、自分とは、他者とはという根源的な問いを再帰的に我々に課す」(MacAloon, 1984; マカルーン, 1988c)という機能であろう。スペクタクル性の持つこのような疑わしきメタ・メッセージからくる再帰的(リフレクティブ)な機能は、世界を映し出す(リフレクト)像を内省(リフレクション)によって再帰的に熟考させる、という働きなのである(マカルーン,1988b)。スペクタクル性のもつ物語はここに意義を見いだす。しかし、マカルーンはそれとても

「物語にすぎない just story」（MacAloon, 1988）と主張してしまうのである。

2.5　大きな物語の崩壊とスポーツの多様化

2.5.1　大きな物語としてのサクセス・ストーリー

ソウルに再び戻ろう。ソウルの開会式・閉会式のテレビ放映で示された民族の祭典は「物語にすぎなかった」のであろうか。韓国のサクセス・ストーリーであるのか。アメリカン・ドリームやジャパニーズ・ドリーム（大橋, 1988）にもじって「オリンピック・ドリーム」という表現が適切なのであろうか。世界平和、国際主義、真摯な戦い、人間の力と能力の顕現、肉体的・道徳的資質の発達、国際親善と友好といったソウル大会当時のオリンピックの理想（IOC, 1985）はスペクタクルの中では実現されたかどうか疑問視される。しかし、これらは大きな物語として現に最高のオリンピックの理想として掲げられている。

さらにスペクタクル性はオリンピックのコンテクストへの配慮を希薄化させる。1988年のソウルと同時期の政治的な状況を見ると、ビルマでは紛争が同時に起こっていたし、日本では天皇のXデーの問題が生じていた。オリンピック開催にこぎつけるまでの南北朝鮮の政治問題もあった。テロリズムの恐怖が常態化してもいた。商業主義の介在もスペクタクルや祭典の前には霞んでしまう。こうしてやはり現実からかけ離れたイメージを産生する一つの民族中心、民族性優位の誇示の物語としてソウル・オリンピックの開会式・閉会式は成立したと考えられる。いわゆる、エスノセントリズム、ナショナリズムである。このコンテクストは競技全体の準備や強化、あるいは運営や応援の仕方にも通底する。

2.5.2　ポスト・モダンとスポーツ状況

スポーツによっての国際親善、普遍的な平和を達成しようというオリンピックの物語は、それを正当化するメタ物語によって保証される。このような自らの正当化のためにメタ物語に準拠する制度のあり方を「モダン」と呼び、このようなメタ物語に対する不信感、物語の危機を「ポスト・モダン」と呼んだのはリオタール（1986）である。この用語は建築の分野で用いられたのであるが、文明論や学問論における真のマニフェストはリオタールであるとされる。この補章で用いているモダン、ポスト・モダンという概念は彼の考えに全面的に依存したものである。

オリンピックのビルドゥングス・ロマン（野家, 1988）としての理想は4年に一回我々の

意識に登らされる。しかし、それは実現にほど遠い様相を呈しているといってよい。ソウルの開会式および閉会式の演出においてせいぜい実現されたのは民族の祭典、民族に統合力の誇示、という小さな物語であったといった方が適切であろう。

韓国にとって、民族の士気高揚はサクセス・ストーリーであったが、日本の金メダル狩りの物語は失敗に終わったようである。日本のスポーツ界でのヒーロー、ヒロイン作りの神話の物語は崩壊したといってよかろう。日本特有のスポーツ「道」の神話を辛うじて保とうとしたのは柔道の斉藤仁の金メダルのみであり、体操競技の高校生コンビにはスポーツ「道」や「体操道」等の深層の意識は存在しなかったのである。これでは日本的な神話は崩壊するしかない。そもそもエア・ピストルやシンクロナイズド・スイミングといったカタカナのスポーツ文化には漢字文化の精神性は不釣り合いであるともいえる。ここには新しきスポーツの物語が構成されそうである。

スポーツは極めて文化的な事象であり、オリンピックも文明史の枠組みの中に位置づく事はいうまでもない。当然、時代の推移、波を被らざるを得ない。従来はモダンの時代状況の性格を受け継ぎ、「大きな物語」に守られていた。それは実効性、合理性、効率性といった、リニアな発展図式に従い、その時代の他の文化状況と相互依存的な関係を保っていた。しかしこの流れは、次のような大きな三つのオリンピックの問題をかえって引き起こしてしまった。(1)科学化、数値化、高度化、勝利主義、メダル主義といったエリート中心の発展主義。(2)コマーシャリズム(資本の合理的な経済性、効率性)によるイベント主義、流行現象。(3)ナショナリズム、エスノセントリズム(東西、南北問題といった政治の問題も)である。

しかしながら、以上の三つの問題はスポーツの非本質的な側面に関わる問題でもある。「…のための」というモダンの発想が不在であったころのプリ・モダンこそスポーツ本来の存在意義があったのであろう。しかし、「…のための」という道具的な意味連関にオリンピック大会が巻き込まれてしまってからは、モダンの特徴的な文化状況からから抜け出すことは出来なかった。その結果、現在オリンピックが苦しんでいる上記のような諸問題が生起したのである。その具体的内容としては、(1)の問題からは、ドーピング、賞金・賞品、地位の保証、韓国ボクシングチームの乱入などである。(2)からはテレビ局の横暴的介入、選手無視の商業論理、コマーシャリンピック。(3)からは幾度となく繰り返された政治的な問題、韓国応援団の存在もしかりである。

しかしながら、IOC の理念や JOC のオリンピック運動推進のメタ物語は人類の平和の

祭典、スポーツマンシップ、フェアプレー、アマチュアリズムなどのオリンピズムという理念によって保護されている。そのいずれもが既に崩壊し形骸化したのにも拘わらず、正当化の根拠として守り続けようとされている。（一応、改正の動きはあるが、オリンピズムは不明な概念のままである。IOCは1996年には「スポーツ権」を唱え始めた）。

大きな物語は崩壊した。ポスト・モダンの条件は、画一的な普遍性でなく多様的な普遍性を容認することにある。ゆらぎや差異性を容認することである。オリンピックはその文明史的流れから新たなる理念を構築する必要がある。それは新たなるスポーツ思想といってよかろう。

そのような思想は、ネオ・オリンピックというものを構成する道に通ずると思われる。そこにおいては、第1に、国や財界を挙げての勝利至上主義、メダル至上主義から個人の運動の快楽、楽しみ、身体の自由（フィジカル・フリーダム）へといった多様性を容認した個性化への転換、第2に、商業五輪（コマーシャリンピック）からプロ、アマの区別のない芸術界のような同等の参加資格に基づいた多様性への転換、第3に国威発揚的なナショナリズムから、国を愛したパトリオティズム、つまり国家間や文化間の差があっても安心できる真の国際主義（インターナショナリズム）への転換、第4にグローバル・ビレッジとしての地球人は人類皆兄弟という視座から、スポーツの中での真の平等というナショナリズムの核を超えた超国家主義（トランス・ナショナリズム）への転換を進めることにつながると思われる。

また、スポーツ事象一般にこのテレビで解釈し得たオリンピックのポスト・モダン状況を敷衍するとどう考えられるであろうか。わが国の場合、スポーツの多様的でしかも画一化した実践スタイルは近未来に置いても益々確固たるものになろう。しかしそれをスポーツの凋落とか軟弱化と見なす必要はない。しかし国や財界を上げてのチャンピオン作りやヒーロー作りの神話は、なかなか崩れ去りはしないであろう。しかしながら、モダンの高度化、メダル狩りに向けた大きなスポーツの物語は崩壊すべき時ではなかろうか。中高年を中心とした体力、健康づくりという身体運動に対する幻想も一つの物語である。当然、若年化しつつあるチャンピオン志向も立身出世、ヒーロー作りの物語である。マスターズ大会のような高齢化社会での高度化を目指した身体運動文化はコメジェディ（コメディ＋トラジェディ）という悲劇的な喜劇ともいえる物語であるし、若者文化のスポーツも自分が主人公になる一つの物語である。このような多様化した小さな物語を正当化するのもまた大きな物語、メタ物語になってしまう。それらの多様的なあり方を正当化する必要はな

いのである。様々な浮遊する運動文化が許され、自前のスポーツ文化を享受する事が許されなくてはならない。それこそがスポーツ文化の惰性化、固定化を防ぎ文化発展のダイナミックスを保証することになると思われる。

もっとも、これは普遍性を放棄するのではなく、小林(1988)によれば、非共約的な差異性において普遍性を見いだすという困難な課題を選択する、ということになるのである。

2.6　結　語

以上、従来のスポーツ解釈学を踏まえた上でマカルーンのスペクタクル理論を参考にしながら、ソウル・オリンピック大会を物語として記述してみた。特に、ソウルの開会式と閉会式のテレビ中継によるスペクタクル性に着目してテクストを構成し、その記述されたテクストを元にソウル・オリンピック大会の解釈を試みた。そのような手順に基づいて、それらの物語性をポスト・モダンと称される現代の文化状況と照らし合わせて検討を加えた。得られた結果は概略次の通りである。

(1)ソウル・オリンピックの開会式・閉会式の民族的な祭典のスペクタクル性は一つの民族誇示の物語であると解釈できる。

(2)オリンピック理念はメタ物語であって、人間性、平和、国際親善といった普遍性によって正当化を求める物語である。

(3)(2)は(1)を正当化しない。(1)は大きな物語を崩壊させる小さな物語である。

(4)日本の場合はヒーロー作りの神話は崩壊し、体操競技での高校生達の存在の如く新たなスタイルの小さな物語が現出した。

(5)ポスト・モダンの文化状況からして、スポーツ文化も多様的な差異性を容認した普遍性を構築し、自前のスポーツ享受を可能にする選択をすべきである。

このような形でソウル・オリンピック大会のテレビ中継の解釈が可能になるといえる。

2.7　本章のまとめ

本章では、従来のスポーツ解釈学を踏まえた上でマカルーンのスペクタクル理論を参考にしながら、テレビ中継で大衆にもたらされたソウル・オリンピックを物語として記述した。研究の目的の第1は、ソウル大会の開会式と閉会式のテレビ中継のスペクタクル性に

着目してテクストを構成することである。第2の目的は、その記述されたテクストを元にソウル・オリンピックを解釈することである。そのような手順に基づいて、それらの物語性をポスト・モダンと称される現代の文化状況と照らし合わせて検討を加えた。

オリンピックの式典自体とそこに演出されるパフォーマンスは「見られる」ことを前提としている。しかも、それはテレビ放映によって世界中の視聴者に見られることを前提とした式典やパフォーマンスの演出なのである。この章では、式典のデザイナーの李氏の意図の確認とともに、式典のアナウンサーの解説も参考にして詳細なテクスト化が可能になった。その記述されたテクストに対し、コンテクストに応じメタ・テクストに配慮しながら解釈することができた。そこでは大きな物語の終焉と小さな物語の台頭のポスト・モダンの状況が読みとれた。こうして、テレビによるスポーツ映像の記録化、大衆への記憶化の一端の構造が見て取れたといえる。

文献　References

李　御寧(1988)ソウル五輪開会式にみる新アジア感覚．中央公論　1239：64-73.

IOC(日本オリンピック委員会訳)(1985)オリンピック憲章：1985年版.

小林康夫(1988)＜ポスト・モダン＞の選択．人文会 20周年記念委員会(編)人文科学の現在．人文会：東京, pp.13-21.

リオタール(小林康夫訳)(1986)ポスト・モダンの条件－知・社会・言語ゲーム．書肆風の薔薇：東京，1986, pp.7-11.〈Lyotard, J. F., La condition postmoderne. Minuit: Paris, 1979.〉

マッカルーン(訳者不明)(1983)祝祭の中の裸者．V.ターナー・山口昌男(編)見世物の人類学．三省堂：東京，pp.376-98.〈MacAloon, J.J., Naked at the feast: Play and the performative genres in the modern Olympic Games〉

MacAloon, J.J.(1984) Olympic games and the theory of spectacle in modern society. In MacAloon, J.J.(Ed.) Rite, drama, festival, spectacle: Rehearsals toward a theory of cultural performance. ISHI: Philadelphia, pp.241-80.

MacAloon, J.J.(1988) Double visions: Olympic Games and American culture. In Segrave, Jeffrey O. and Chu, Donald(Eds.) The Olympic Games in transition. Human Kinetics Books: Champaign, Illinois, pp.279-94.

マカルーン(柴田元幸・菅原克也訳)(1988a)オリンピックと近代－評伝クーベルタン．平凡社：東京，pp.525-29.〈MacAloon, J.J.(1981) This great symbol: Pierre de Coubertin and the origin of the modern Olympic Games . The University of Chicago Press: Chicago.〉

マカルーン(光延明洋訳)(1988b)序説 文化パフォーマンス、文化理論．マカルーン(編)(光延明洋他訳)世界を映す鏡．平凡社：東京，pp.11-33.〈MacAloon, J.J.(Ed.)(1984) Rite, drama, festival, spectacle: Rehearsals toward a theory of cultural performance, ISHI: Philadelphia, pp.1-15.〉

マカルーン(光延明洋訳)(1988c)近代社会におけるオリンピックとスペクタクル理論．マカルーン(編)(光延明洋他訳)世界を映す鏡．平凡社：東京，pp.387-442.〈MacAloon, J. J.(Ed.)(1984) Rite, drama, festival, spectacle: Rehearsals toward a theory of cultural performance. ISHI: Philadelphia, pp.241-80.〉

舛本直文(1988a)スポーツのパラドックス論の現状と課題．東京都立大学体育学研究 13:73-81.

舛本直文(1988b)スポーツの解釈学の可能性と限界．体育学研究 33-2:101-110.

舛本直文(1989a)スポーツの象徴的意味－2. 解釈学的問いに関わる基本的諸問題．体育原理研究 19:30-36.

舛本直文(1989b)現代スポーツの解釈とスポーツ文化の未来学．三好　喬(監)コミュニティ・スポーツ－過去・現在・未来－．ぎょうせい：東京，pp.122-147.

野家啓一(1988)「科学」という物語．季刊思潮 1:74-93.

大橋良介(1988)思想としての日本文化論．中央公論 1240:80-95.

下中直也(編)(1987)哲学事典(初版第19刷)．平凡社：東京，p.542.(1971, 初版第1刷)